

1 研究テーマ

児童の満足感を高める学級経営をめざして～教師の効果的な働きかけを探る～

2 はじめに

学級は、一人ひとりの子どもたちが集まって力を発揮し、それを一つの大きなものにしていくところである。社会は変化してきたが、これからの子どもたちにも「学校って本当に楽しいところだよ」「友だちがいっぱいいてうれしい」という気持ちを持ってほしいと願っている。そのためには、教師のあり方は、どうあるべきか、学級経営を「人間関係」という視点で、研究していきたいと考えた。

3 研究目的

(1) テーマの設定

- ①児童の所属の基本となる「学級」についての理解を深める。
- ②児童一人一人の満足感を高めるための教師の働きかけを追究する。
- ③学級経営の力を向上するための手立てをまとめる。

(2) 「児童の満足感」について

(3) 研究仮説

学級における「児童の満足感」とは

リレーション ルール

楽しい→満足→次への意欲

学級の中に

- ・支えてくれる友だちや先生が存在
- ・自分の居場所が確保
- ・自分の力が発揮できる

一人一人が生き生きと活動できる

児童の実態把握に努め、学級集団の理解を深めながら、実態に応じた働きかけをすることで、児童の満足感を高めていくと考える

4 研究内容

(1) クラス全体の方針

Q-U、自作のアンケート、児童観察をもとに、4つの方針で取り組むことにした。

クラス全体の方針(学活を中心として)

実態	方針
<ul style="list-style-type: none"> ・認められていないと感じている児童がいる ・関わり方が弱い 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の困っていることを出せる場を設定する ・「みんなで」の達成感を高める
<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの人と色々なことをするのが楽しい 92.5% →よさとしてのばしたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・「できた」喜びのためのねらいの明確化 ・意図的に友だちと関わる機会を作る

(2) 個別の方針(抽出児童について)

友だち・教師との関係がつくりにくい2人の児童について、方針をたてて取り組むことにした。

個別の方針

実態	方針
<p>Aさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人で本を読んでいる ・自分から友だちをつくりにくい ・友だちに注意されたら「嫌だ」と感じてしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・対教師との関係づくりをすすめながら友だちに目を向けさせる ・教師が何をしているか明確にする
<p>Bさん</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちとうまく関われない ・人の嫌がることをする ・学習に対する認められ感が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの関わり方を具体的に提示する ・やっていることに自信をつけさせる

(3) 授業の実際

困っていることを出せる場の設定 「みんなで」の達成感を高める
学活「音楽会を成功させよう」

ねらい 友だちとひとつのことをつくる体験の大切さを感じ取り、音楽会を成功させようとする気持ちを高める

①音楽会に向けての個人のがんばりを確認する

②まだできていないことを共有する
・自分がお客さんで見ているら おもしろくない
・笑顔が盛り上がっていない

自己評価
相互評価

③今後できることを確認する

すばらしい音楽会 達成感を高めた

(4) 小グループでの活動について

意図的に友だちと関わる機会をつくる
小グループでの話し合い活動

一緒に考えることのできる課題を設定する

話し合いの仕方を共有する

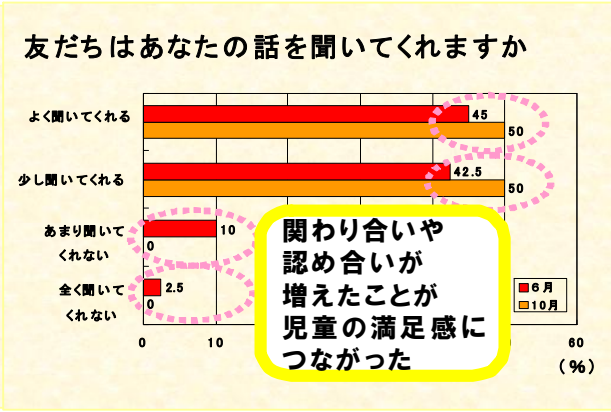
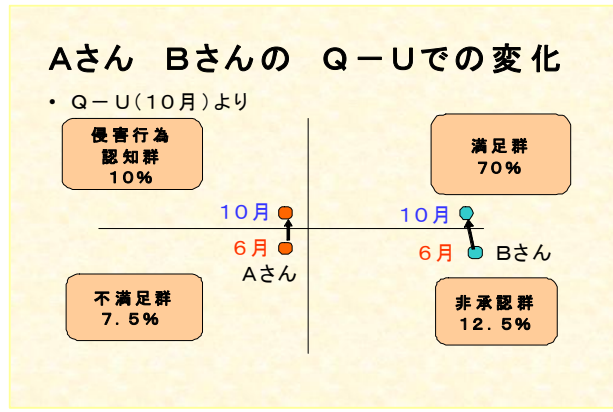
ボード・ワークシート等の活用

友だちといると楽しい

わかってもらってよかった

クラス全体の中でも発表することができる

(5) Q-Uの結果より



学級全体・個別に働きかけたことで、児童のつながりが深まった。

5 研究のまとめ

以下、児童の満足感を高めるための効果的な働きかけについてまとめたものである。

効果的な働きをするために重要なことは

- 1 児童の実態把握の充実
 - ・児童観察
 - ・調査(Q-U、児童への自作アンケート)
 - ・ふだんの会話から得られるヒント
- 2 実態に合った働きかけ
- 3 リレーションとルールのバランス
- 4 「楽しい」で終わらないで価値付けして実感させる

「できた」喜びのためのねらいの明確化

ねらいが最終的な目標のひとつになっているか

きちんと評価できるねらいであるか

「できた」という喜びが持てるか

ねらい達成のために実施可能な課題で構成されているか

ねらいを達成するためには何を積み上げるか・失うか

教師側

児童側

児童が大事にしているものは何か

ねらいが児童にとって価値のあることか

実態把握を充実し、実態に応じた働きかけをすることが大切である。授業においては、ねらいを児童の視点で見つめなおし、明確化することが、児童の満足感につながる。

6 今後の課題

- (1) 担任と子どもの1対1という基本を大切にし、友だちとつながりたくなるような取り組みの実践
- (2) 子どもをありのままに見る(たさない・ひかない・現状をよく見る)ことの継続
- (3) 個別・全体への働きかけを授業実践の中で生かし、さらに児童の満足感を高める

7 おわりに

児童が、どういうことを思っているのか、何をを目指したいか、教員側ではなく、児童側に立つて考えることの大切さを実感した。Q-Uの活用についても、様々な視点でとらえてみると課題が浮き上がってくるのが理解できた。児童が満足するために、友だちとの関わりをいかにしていくか、「楽しい」を価値づけしていく必要がある。